



生涯学習について

放送大学埼玉学習センター所長，埼玉大学名誉教授
堀尾健一郎 HORIO, Kenichiro

近頃は、「人生100年時代」という言葉とともに、「生涯教育」もしくは「生涯学習」という言葉を見聞きすることも多い。筆者は本年3月に埼玉大学を定年退職し，4月からは放送大学に特任教授／埼玉学習センター所長として勤務している。放送大学はユニークな大学であり，学生の年齢幅も極めて広い。多くの自分より年配の学生を見ていると「生涯学習」という言葉を実感することも多い。本稿では放送大学の宣伝と，生涯教育に関する若干の私見を述べたいと思う。

1. 放送大学の沿革と組織

放送大学は1985年に政府出資の特殊法人が設置母体の通信制の大学として発足した。2003年からは学校法人放送大学学園が設置母体となったため私立大学の扱いではあるが，政府（文部科学省，総務省）からの資金に依存する割合はかなり高いようである。総務省が関係しているのは放送大学が放送免許を持っているからのようであり，千葉市幕張の大学本部にはテレビ・ラジオのスタジオがあり放送発信をしている。

学部としては教養学部教養学科の1学部1学科であるが，“生活と福祉”，“心理と教育”，“社会と産業”，“人間と文化”，“情報”，“自然と環境”の6つのコースがあり，多様な学問分野を網羅している。1学部1学科であるのは，従来は放送チャンネルが1つしかなかったので，「講義室が1つということは1学科だ」という理屈だったとのことである。2001年に大学院修士課程を設置し，2014年には博士後期課程も設置している。近年は修士課程の入学試験はかなりの激戦である旨聞いている。

現在は，いわゆる正規生と科目履修生合わせて約8万人が在籍しており，筆者の勤務する埼玉学習センターにも3千数百人が所属している。

2. 放送大学の教育

放送大学の授業には，放送授業，オンライン授業，面接授業の3つのカテゴリーがある。“放送授業”（2単位）はBS放送（テレビ232ch，ラジオ531ch）で提供される45分15回の授業を視聴するとともに，配布されるテキストを用いて勉学する授業であり，学期末に筆記試験を行って単位認定する。放送は毎週同じ曜日同じ時間に配信されるが，履修登録した学生に対してはWEB上でも提供されており，既放送分だけでなく先行する授業に関しても視聴できる。学習センター，サテライトスペース，再視聴施設で視聴することも可能である。放送授業が1方向の授業であるのに対し，“オンライン授業”はいわゆるe-learningの形態で，インターネットの双方向性を利用して講義の視聴，課題・レポートの提出，ディスカッションへの参加を行い，授業の中で単位認定まで行うタイプの授業（1or2単位）である。“面接授業”というのは放送大学での方言で，一般のface to faceの授業のことである。学生は修了するためには一定数の面接授業もしくはオンライン授業の単位を取らなければならない。面接授業は90分の授業8コマで1単位となり，試験やレポートで単位認定される。

放送大学本部は千葉市幕張にあり、前記各コース毎に相当数の専任教員がいる。専任教員は放送授業とオンライン授業の制作に携わっている。約 300 本の放送授業が前後期それぞれ年 2 回放映されているが、概ね 5 年を経過した授業は再度新たに制作している。授業の制作においては、授業内容の検討から開始し 2 年以上をかけて番組の録画までを行っている。大学本部の専任教員は卒業研究（必修ではないが受講者はそれなりにいる）の指導や、修士課程・博士後期課程の指導教員も務めている。

毎学期の学費は履修単位数に応じて納入する仕組みになっており、学部の場合 1 単位 5,500 円である。学部を卒業して学士の学位を取得するのに必要な 124 単位（大学設置基準で定められている）を修得するためには、最低限であると入学金を含めて 706,000 円と 4 年生国立大学の 1/3 程度の費用で済ませることができる。

3. 学習センター

放送大学の学習センターは全都道府県に設置され、東京は 4 か所、道府県は各 1 か所であるので、合計 50 か所の学習センターがある。それ以外に少しスケールの小さいサテライトスペースが全国に 7 か所ある。学習センターの主要任務は、前述した放送授業の単位認定試験を行うことと、面接授業を実施することであり、筆者の勤務する埼玉学習センターでは、6 つの講義室のほか講堂、実験系の授業を行う学生実験室、パソコン実習室、ゼミ室などの部屋を設けている。放送授業の再視聴室や図書室も備えている。

面接授業については、埼玉学習センターで年間 150 科目程度、全国では約 3000 科目開講されている。ほとんど全てを客員教員や非常勤講師が担当している。筆者も「ものづくり概説」という科目を“社会と産業”コースの授業として開設した。

年配の学生が中心ではあるが、学生サークルが埼玉で 20 弱程度あり、平日昼間の空いている講義室などで活動している。平日は図書室で自習する学生も含めて、居る学生は年配者ばかりという状況になっている。学習センターには大学祭に相当するイベントもあり、各種企画でプロ級の腕前を披露する者が多くいて、多種多様な学生がいることを実感させられる。

4. 放送大学の学生

放送大学には 10 代から 8,90 代まで幅広い年齢層の学生がおり、最も多いのは 4,50 代であるが、定年退職者など 60 代以上が 3 割程度を占める。4,50 代やそれ以下の年齢の学生では職業をもちながら勉学している者が多い。そのため、面接授業の 80%程度は土日に開講している。土曜に 4 コマ、翌日曜に 4 コマ授業し 1 週末で完結する科目もある。

学生は概して熱心に聴講し、一般大学の学生と較べると高い熱意が感じられる。あるコースを卒業しても別のコースに入学する学生も多い。入学学生に対する再入学学生の比率リピート率は約 50%である。大学としては全 6 コースを踏破すると名誉学生の称号を授与するが、全国で年に数十名が達成している。

5. 生涯学習について

冒頭にも述べたように近年「生涯学習」が注目を集めている。文部科学省の HP によれば、教育基本法第 3 条において生涯学習の理念として、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない。」と規定されており、文科省には生涯学習を担当する部局があり、地方自治体にも生涯学習担当部署が設けられるのが通例となっている。自治体主催の市民大学、シニアユニバーシティなどの講座も数多く行われている。

ところで、筆者の勤務する学習センターには 96 歳の学生がおり、毎日のように来所して図書室で自学自習している。その学生にとっては、勉学の成果を生かすのではなく、“学ぶことそのものが目的”となっている。その他にも 3 割の年配の学生達を中心にして同様に勉学そのものを目的としている者

が多いように感じられる。

筆者がいままで体験してきた“教育”は、卒業証書を得る、資格試験に合格する、仕事、家庭生活、社会生活などのために必要な知識を得る、など“目的を達成するための手段”であり、それが勉学の目的であった。「生涯学習」に関しても、前述した教育基本法の条文に「その成果を適切に生かす」という文言があったり、(筆者が関与している)市民大学の企画などでも「役に立つ」という視点に重きがおかれているなど、“教育の成果”にこだわっているように感じられる。

本学の学生達のような“学ぶことそのものが目的”については、筆者も未経験の領域であり、何をどのように対処していったら良いのか、を考えながら戸惑いつつ日々を過ごしている、という今日此の頃である。